

## 若手科学者アジア会議第1回会合報告

「アジアにおける若手科学者の位置づけと未来について」

日本学術会議若手アカデミー委員会の主催により、先の2月13日、14日の二日間にわたり第一回目の若手科学者アジア会議が開催された。昨年五月にドイツのハレで開催されたグローバル・ヤングアカデミー（以下GYAと略）での駒井章治氏、Orakanoke Phanraksa氏、Wibool Piyawattanametha氏らの構想に端を発する本会議の目的は、アジア諸国の卓越した研究者同士の意見交換と交流を促進することであり、狩野光伸氏、西山雄二氏の助力のもと開催が実現した。会議にはアジア12カ国（バングラデシュ、中国、インド、インドネシア、カザフスタン、マレーシア、パキスタン、フィリピン、スリランカ、台湾、タイ、日本）から21人の若手研究者（うち9名は若手アカデミー委員）が参加し、活発な議論を繰り広げた。

一日目にはAftab Ahmad氏が「アジアにおける研究：強みと弱み」というタイトルで講演し、アジアが最大の人口を抱える地域でありながら、研究とイノベーションにおける存在感を発揮できない現状について論じた。この講演は会議全体の基調を形作ることとなり、アジア地域の研究とイノベーションを活性化させることの重要性について質疑応答がかわされた。そしてディスカッションのあと一同は東京大学と科学未来館への訪問を行った。

二日目の前半には異分野研究交流を目的とした三つの講演が有り、Kassymkhan Kapparov氏が「カザフスタンにおける知識基盤経済への以降のためのインフラストラクチャー」について、関口仁子氏からは「核子間三体力：古くて新しい核力の話」について、そしてWibool Piyawattanametha氏が「光マイクロ内視鏡技術の発展」に関して講演が行われた。

同日の後半にはアジア地域で若手研究者の置かれた状況について議論が行われた。特に、各地の科学技術政策や、若手研究者のキャリアトラック、アジア各国における若手アカデミーのあり方、学際的な研究の可能性などについて比較や経験共有が行われた。また、GYAが行っている各国の若手研究者の現状調査と同様のものをアジア地域に広げ、より深い分析を行う必要性も認識された。そしてアジア諸地域の課題に特化して今後も議論を続けていくべく、この若手科学者アジア会議を定期開催していくことが決定された。

（文責 隠岐さや香）